

出題分析		
試験時間 80 分	配点 100 点	大問数 3 題
分量 (昨年比較) [減少 同程度 増加]		難易度変化 (昨年比較) [易化 同程度 難化]
概 評 —— 出題の特徴・特記事項		
<p>例年、ほとんどの問題が空所補充形式となっており、半分がマークセンス方式である。今年度も同様の形式であった。出題される分野については、例年、力学と電磁気学の分野がそれぞれ 1 題、熱力学または波動、原子の分野のいずれかから 1 題である。今年度も昨年度に引き続き、熱力学の分野から出題された。例年は問題設定、設問ともに標準的なものが多く解きやすいが、今年度は、熱力学の後半に煩雑な計算が求められた。そのため、分量を増加、難易度を難化とした。全体的な特徴として、図がわかりやすく、解くためのヒントを得やすい。文章をじっくりと読むとともに、図もよく見て解答をするように心掛けたい。</p>		

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	力学 等加速度運動 円運動	力学からは、棒について小球の円運動がテーマであった。後半は、円運動の途中で小球が棒から離れ、重力を受けて運動する。平易な内容で計算の負担も少なく取り組みやすい。後半の小球の水平位置については、初期位置を加えておくことを忘れないようにしよう。	やや易
II	電磁気 コンデンサー ガウスの法則 誘電体の挿入	電磁気から、平行板コンデンサーの極板間にできる電場について考察する問題が出題された。電場をガウスの法則で考えることは典型的だが、極板の表と裏を分けて考えていることが特徴的であった。電場を表す式の各電荷の符号は、電荷の正負と電場を考える位置で決まる。	標準
III	熱力学 状態方程式 気体の状態変化	ばねでつながれたピストンで仕切られた 2 部屋についての熱力学の問題が出題された。エネルギーを表す際に使用できる文字が、熱力学でよく用いる文字ではなく、 m , g , L であることに注意しよう。現象としては難しくないが、計算が煩雑な問題で、特に後半はそれが顕著であった。	やや難

設問構成 (設問数・形式・内容)								
大問 番号	設問数 (枝問総数 ^{※1})	選択式 枝問数	記述式 枝問数	語句 (空所補充) (一問一答)	計算	論述	描図 ^{※2}	その他
I	12 問 (12)	5	7	3	9	0	0	
II	18 問 (18)	11	7	1	17	0	0	
III	14 問 (14)	6	8	0	14	0	0	

※1 「枝問総数」は各設問 (小問) に含まれる枝問も個々に数えた場合の全設問 (小問・枝問) の総数。
設問形式・設問内容別の設問数も、これと同様の方法で算出した。

※2 グラフ・図を含む。

合格のための学習法

例年、立命館大学の入試物理は基礎から標準レベルの問題で大半が構成されている。したがって、基本事項をよく理解した後、標準的なレベルの問題集などで演習を積むようにし、すべての分野で典型的な問題が解けるようにしておこう。また、様々な現象が組み合わせられた問題も出題されるので、普段から文章をじっくり読み、誘導に沿って解答できるようにしておこう。また、計算が煩雑な場合があるため、普段から最後までキッチリと計算しておくことを心掛けたい。